

西洋中世哲学史講義 I

川添 信介

はじめに

「西洋中世哲学史講義 I」(前期)と「同 II」(後期)は、連続して受講することを前提として構成されている。

本年度の予定：

前期：

- [1] 序説：西洋中世哲学史を学ぶ意義
- [2] 12 世紀半ばまでの概観
 - (1) 「プラトン主義」なるもの
 - (2) ポエティウス
 - (3) カロリング・ルネサンスとエリウゲナ
 - (4) アンセルムス
 - (5) 12 世紀ルネサンス
- [3] アリストテレス哲学の導入

後期：

- [1] トマス・アクィナスの哲学
- [2] ドゥンス・スコトゥスと 13 世紀末期の哲学
- [3] オッカムのウィリアムと 14 世紀の哲学

成績評価の方法：

前期末・後期末の筆記試験による。その試験内容は、

- 授業中に扱った主要概念・用語・歴史的事象についての説明
- 授業中に扱った哲学上の問題についての記述説明

の二つの種類とする。

授業への参加要件：

特になし。しかし、現在はかなりの数の邦語文献もあるので、指示した参考文献をあらかじめ読んでおくことが必要となる場合がある。

質問その他：

- 授業中、授業後の質問はいつでも受けつける。
- しかし、授業外での質問は基本的に電子メールによるものとするが、どうしても対面による質問を希望する場合にはあらかじめアポをとってからにすること。
- 配付資料は以下のウェブサイトからいつでもダウンロードできる。

授業のサイト : <http://aequivocum.net/class.html>

メールアドレス : skawazoe@bun.kyoto-u.ac.jp

1 序説—西洋中世哲学史を学ぶ意義

- [1] そもそも、哲学の「歴史」を学ぶことは「哲学する」のに役に立つのか？
- 量子力学を勉強するときに、ニュートンの『プリンキピア』を読む学生はいない？
 - 日本文学を勉強するときに、シェイクスピアの『マクベス』を読む学生はいない？
 - マクロ経済学を勉強するときに、アダム・スミスの『国富論』を読む学生はいない？
 - 生命倫理学を勉強するときに、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を読む学生はいない？
- [2] さらにとりわけ、「中世」の哲学の歴史を学ぶことは、「今、哲学する」のに役に立つのか？
- 古代の哲学史はどう？ 近世の哲学史はどう？ 現代の哲学は？
 - 中世は「暗黒時代」？ それはキリスト教という宗教のため？
 - 現代の世界は非（反）宗教的な時代？
 - 中世には本物の「哲学」など存在しなかった？
- [3] 結局のところ、「中世哲学の歴史」を学ぶことは、何の役に立つのだろうか？
- 「哲学的」とされる問題には時代を超えた、不変の面がある（はず？）。
 - 人間の考えることにはパターンがある。
 - まったく無前提に哲学することはできない。

略年表

c.= circa (頃) †= 没年

347	†Platon
322	†Aristoteles
B.C.3-1c.	ギリシア語訳聖書 (Septuaginta) の成立
84/83	†Philon
43	†Cicero
c.30	†Jesus
c.60	†Paulus
c.165	†Justinus
2 世紀末	現在の新約聖書の正典化がほぼ完了
c.220	†Tertullianus
253/54	†Origenes
270	†Plotinus (新プラトン主義)
313	ミラノの勅令
325	第 1 ニカイア公会議 (アリウス派異端となる)
379	†Basilus
381	第 1 コンスタンチノーブル公会議 (三位一体論確定)
392	テオドシウス帝の異教禁止令
420	†Hieronymus、ラテン訳聖書 (Vulgata)
430	†Augustinus
451	カルケドン公会議 (キリストの両性論確定)
485	†Proclus
495	Clovis の洗礼
524/25	†Boethius
529	Academeia 閉鎖・ベネディクト修道会設立
6 世紀?	Corpus Dionysicum
622	ヒジュラ (イスラム共同体の成立)
633	†Isidorus
711-12	イスラムのスペイン征服
c.754	†Joannes Damascenus (最後のギリシア教父)
800	Charlemagne 戴冠 (カロリング・ルネサンス)
c.871	†Scotus Eriugena
950	†Al-Fārābī
1037	†Avicenna
1054	東西教会の分裂
1077	カノッサの屈辱

1095	第 1 回十字軍の提唱
1109	†Anselmus
c.1142	†Abaelardus
1153	†Bernardus de Clairvaux
1198	†Averroes
1215	Magna Carta of King John
1216	ドミニコ会認可
1223	フランシスコ会認可
1231	パリ大学へのグレゴリウス 9 世の大勅書 (大学のマグナカルタ)
1274	†Thomas Aquinas, Bonaventura
1277	パリ司教による異端的アリストテレス主義への禁令
1308	†Duns Scotus
1309	アヴィニオン捕囚始まる (-1377)
1321	†Dante
1336	Petrarca のヴァントゥー山登攀
1340s	黒死病の流行
1347/49	†William of Ockham
1378	教会大分裂 (2 教皇並立、-1417)
1384	†Wyclif
1431	†Jeanne d'Arc
1453	ビザンツ帝国滅亡
1464	†Nicolaus Cusanus
1484	Marcilio Ficino によるプラトン全著作のラテン訳完成
1517	Luther 95 theses (宗教改革)
1519	†Leonardo da Vinci
1534	イエズス会の認可
1527	†Machiavelli
1530	コレージュ・ド・フランス設立
1592	†Montaigne
1616	†Shakespeare
1617	†Suárez
1645	†Grotius
1650	†Descartes
1662	†Pascal
1727	†Newton

参 考 文 献

- [1.1] Marenbon, John (ed.), *The Oxford Handbook of Medieval Philosophy*, Oxford UP 2012.
- [1.2] Lagerlund, Henrik (ed.), *Encyclopedia of Medieval Philosophy: Philosophy Between 500 and 1500*, 2 vols, Springer 2011.
- [1.3] Gracia, Jorg J.E. and Noon, Timothy B. (eds.), *A Companion to Philosophy in the Middle Ages*, Blackwell, 2003.
- [1.4] McGrade, A.S. (ed.), *The Cambridge Companion to Medieval Philosophy*, Cambridge U.P., 2003. 邦訳 A・S・マクグレイド編著『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』（川添信介監訳）京大学術出版会 2012.
- [1.5] Kretzmann, N., Kenny, A. and Pinborg, J. (eds.), *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, Cambridge U.P., 1982.
- [1.6] Pasnau, Robert (ed.), *The Cambridge History of Medieval Philosophy*, 2 vols. Cambridge U.P., 2010.
- [1.7] Armstrong, A.H. (ed.), *The Cambridge History of Later Greek and Early Medieval Philosophy*, Cambridge U.P., 1967.
- [1.8] Dronke, Peter (ed.), *A History of Twelfth-Century Western Philosophy*, Cambridge U.P., 1988.
- [1.9] Algra, K., Barnes, J., Mansfeld, J., and Schofield, M. (ed.), *The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, Cambridge U.P., 1999.
- [1.10] Schmitt, Ch., and Skinner, Q. (eds.), *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, Cambridge U.P., 1988.
- [1.11] Marenbon, John, *Early Medieval Philosophy(480-1150) An Introduction*, Routledge, 1983, 1988². 邦訳 マレンボン『初期中世の哲学』（中村治訳）勁草書房 1992.
- [1.12] ———, *Later Medieval Philosophy(1150-1350) An Introduction*, Routledge, 1987. 邦訳 マレンボン『後期中世の哲学』（加藤雅人訳）勁草書房 1989.
- [1.13] ———, (ed), *Medieval Philosophy*, Routledge History of Philosophy, vol.III, Routledge 1998.
- [1.14] Gilson, Étienne, *History of Christian Philosophy in the Middle Ages*, Sheed and Ward, London, 1955.
- [1.15] ———, *L'ésprit de la philosophie médiévale*, Vrin, Paris, 1943. 邦訳 ジルソン『中世哲学の精神』上下（服部英次郎訳）筑摩書房 1974-75.
- [1.16] Copleston, Frederick, *A History of Philosophy*, vols 2-3, Image Books, 1950. 邦訳『中世哲学史』（箕輪秀二・柏木英彦訳）創文社 1970.
- [1.17] Bréhier, Émile, *Histoire de la philosophie*, I, Antiquité et Moyen Âge, PUF, Paris 1931. 邦訳 ブレイエ『哲学の歴史 3 中世・ルネサンスの哲学』（渡辺義雄訳）筑摩書房 1986.
- [1.18] Hirschberger, Johannes, *Geschichte der Philosophie*, I Teil, Altertum und Mittelalter, Herder, 1948¹, 1980¹². 邦訳 ヒルシュベルガー『西洋哲学史 II 中世』（高橋憲一訳）理想社 1970.
- [1.19] Armstrong, A. H., *An introduction to Ancient Philosophy* London, 1965. 邦訳『古代哲学史』（岡野昌雄・川田親之訳）みすず書房 1987.
- [1.20] 服部英次郎『西洋古代中世哲学史』ミネルヴァ書房 1976.
- [1.21] 中川純男（責任編集）『哲学の歴史 3 神との対話』中央公論新社 2008.
- [1.22] 中川純男・加藤雅人（編集）『中世哲学を学ぶ人のために』世界思想社 2005.

- [1.23] *Histoire de la philosophie*, I, Orient – Antiquité – Moyen Âge, Pléiade, Gallimard, Paris, 1969.
- [1.24] Jeuneau, Édouard, *La Philosophie médiévale*, Coll. Que sais-je?(1044), PUF, 1963.
邦訳 ジョノー 『ヨーロッパ中世の哲学』(二宮敬訳) 白水社 1964.
- [1.25] De Libera, Alain, *La philosophie médiévale* Coll. Que sais-je?(1044), PUF, 1989.
- [1.26] ———, *La philosophie médiévale*, Collection Premier Cycle, PUF, 1993.
邦訳 アラン・ド・リベラ 『中世哲学史』(阿部一智・永野潤・永野拓也訳) 新評論 1999.
- [1.27] K・リーゼンフーバー 『西洋古代・中世哲学史』 平凡社 (平凡社ライブラリー) 2000.
- [1.28] K・リーゼンフーバー 『中世思想史』 平凡社 (平凡社ライブラリー) 2003.
- [1.29] ダニエルー他 『キリスト教史』 全 10 巻 (上智大学中世思想研究所、編訳・監修) 平凡社ライブラリー
1996-97.(ハードカバーの初版は 1980-82)
- [1.30] 『中世思想原典集成』(上智大学中世思想研究所、編訳・監修) 全 21 巻 平凡社 1992-2002

有益なウェブサイト

- [1.31] <http://labyrinth.georgetown.edu>
哲学に限らず中世研究の包括的なページ。様々な原典テキストや図像へのリンクを含む。
- [1.32] <http://www.siepm.uni-freiburg.de/>
国際中世哲学会 (SIEPM) の公式サイト
- [1.33] <http://jsmp.jpn.org/>
日本の中世哲学会の公式サイト
- [1.34] <http://www.ksmp.net/>
京大中世哲学研究会の公式サイト 有益?
- [1.35] <http://www.iep.utm.edu/>
Internet Encyclopedia of Philosophy (そのまま)

2 12 世紀半ばまでの概観

12 世紀後半から 13 世紀を分水嶺として、それまでの中世哲学の基本的枠組みはプラトン主義 (Platonism) が与えていた。

2.1 「プラトン主義」なるもの

アウグスティヌスにその典型・原型を見る

- 「彼ら (プラトン派) ほどわれわれに近付いたものは誰もいなかった。」(『神の国』8 巻 5 章)
- 「それゆえもしそれらの人々 (プラトン派) が再び私達とともにこの世を送りうるとすれば、... ほんのわずかの言葉と内容とを変えることによって... キリスト教徒になることであろう。」
(『真の宗教について』7 節)
- 「それゆえ最高で真実の神について、そのようなことを、すなわちその神は (1) 被造物の創造者であり、(2) 認識されるべきものの光であり、(3) 為さるべきものの善であると考え、またその神からして、私達は (1) 自然の原理と (2) 教説の真理と (3) 生の幸福とを与えられると考えた哲学者たちは、いずれもいっそう適切にプラトン派と呼ばれるほうが適当であろう (後略)。
Quicumque igitur philosophi de Deo summo et vero ista senserunt, quod et (1) rerum creatarum sit effector et (2) lumen cognoscendarum et (3) bonum agendarum, quoe ab illo nobis sit et (1) principium naturae et (2) veritas doctrinae et (3) felicitas vitae, sive Platonici accommodatius nuncupentur, ...
(『神の国』8 巻 9 章)
- プラトン主義の基本的特徴：(1) 存在論、(2) 認識論、(3) 倫理

2.2 教父における古代の継承とボエティウス

・ボエティウスまでの関連年表

年 代	事 項	著 作
BC. 338 1 世紀	イソクラテス (Isokrates) 没 アンドロニコス (Andronicus) による (?)Corpus Aristotelicum の成立	
AD 127/48 c.150	プトレマイオス (Claudius Ptolemaeus) 盛期 ゲラサのニコマコス (Nicomachus of Gerasa) 盛期	
c.200 253/4 270	アフロディシアスのアレキサンドロス (Alexandros Aphrodisias) 盛期 オリゲネス (Origenes 184/5-) 没 プロティノス (Plotinus, 205-) 没	
c.305 325 c.325 c.370 381 4 世紀末	ポルピュリオス (Porphyrius, c.250-) 没 第 1 回ニカイア公会議 イアンブリコス (Iamblichus c.250-) 没 マリウス・ヴィクトリヌス (Marius Vic- torinus, -c.285) 没 第 1 回コンスタンチノーブル公会議 カルキディウス (Calcidius) の『ティマ イオス注解』成立	
420 430 451 477 c.480 481 483 485 487	ヒエロニムス (Hieronymus, c.347-) アウグスティヌス (Aurelius Augusti- nus, 354-) 没 カルケドン (Chalcedon) 公会議 西ローマ帝国、オドアケル (Odoacer, Odoacar) によって滅亡 ボエティウス、ローマに生まれる クロヴィス (Clovis) カトリック改宗 両性論をめぐる教会分裂 (519 まで) プロクロス (Proclus, 412-) 没 ボエティウスの父、オドアケルのもとで 執政官となるがすぐに没。ローマ市長シ ンマクス (Quintus Aurelius Memnius Symmachus) の庇護を受け、後に娘ル スティキアナ (Rusticiana) と結婚する	

493	テオドリック (Theodrich) 東ゴート王国建国、都はラヴェンナ。王自身はアリウス派の属す	
c.500	ディオニシウス・アレオパギータ (Dionysius Areopagita) 盛期	『算術教程』 <i>De Institutione Arithmetica</i> 『音楽教程』 <i>De Institutione Musica</i> この他に幾何学と天文学についても書いたが現存しない。
c.504-5		『イザゴーゲー第一注解』 <i>In Porphyrii Isagogen, editio prima</i> また、アリストテレスのオルガノンのラテン訳をなす(『分析論後書』だけ散逸)
c.505-6		『定言的三段論法』 <i>De syllogismis categoricis</i>
c.505-9		『分類について』 <i>De divisione</i>
c.506	ボエティウス、テオドリックの秘書カシオドルス (Cassiodorus) を通じて日時計と水時計の政策依頼を受ける	
c.507-9		『イザゴーゲー第二注解』 <i>In Porphyrii Isagogen, editio secunda</i>
c.509-11		『カテゴリー論注解』 <i>In Aristotelis Categorias</i>
510	ボエティウス、テオドリックの執政官となる	
c.512 以降		『カトリックの信仰について』(第4論文) <i>De fide catholica</i> 『エウテウケスとネストリウス駁論』(第5論文) <i>Contra Eutychem et Nestorium</i> 『デ・ヘブドマディプス』(第3論文) <i>Quomodo substantiae in eo quod sint bonae sint cum non sint substantialia bona</i>

513 以後		『命題論第一注解』 <i>In Arisitolis Perihermeneias, editio prima</i>
c.513-16		『命題論第二注解』 <i>In Arisitolis Perihermeneias, editio secunda</i>
516-22		『仮言的三段論法』 <i>De syllogismis hypotheticis</i> 『キケロのトピカ注解』 <i>In Ciceronis Topica</i> 『異なったトピカについて』 <i>De topicis differentiis</i> また、アリストテレスの『トピカ』への注解は散逸
c.515-45	シンプリキオス (Simplicius) 盛期	
c.517-26	アンモニウス (Ammonius, c.436/45-) 没	
c.520		『父・子・聖霊は神性に実体的に述語づけられるか』(第2論文) <i>Utrum Pater et Filius et Spiritus Sanctus de divinitate substantialiter praedicentur</i> 『三位一体論』(第1論文) <i>De trinitate; Quomodo Trinitas unus Deus ac non tres Dii</i>
522	ボエティウスの二人の息子が執政官 (Consul)、自身が宰相 (magister officorum) となる	
523	東ローマ皇帝ユスティヌス、アリウス派を異端とする	
524	ボエティウス反逆罪に問われ処刑される	『哲学の慰め』 <i>De consolazione philosophiae</i>
525	シンマクス処刑される	
526	テオドリック没	
529	東ローマ帝国ユスティニアヌス、アカデメイアを閉鎖	

参 考 文 献

- [2.2.1] Boethius, *Opera omnia*, Patrologia Latina, vols. 63-64. Paris, 1847.
- [2.2.2] Boethius, *Tractates, The Consolation of Philosophy*, (tr.by Stewart,H.F., Rand,E.K. and Tester,S.J.) Loeb Classical Library. 74. 1973(New Edition)
- [2.2.3] Boethius, *Boethii De institutione arithmetica libri duo, De institutione musica libri quinque*(ed. Friedlein, G.) Teubner, Leipzig, 1867/1966.

- [2.2.4] *Aristoteles Latinus*, I, II, III, V, VI, Bruge/Paris, 1961-75. (アリストテレスのオルガノンの翻訳が含まれている。)
- [2.2.5] Boethius, *In Isagogen Porphyrii Commenta* (ed. Brandt, S.), *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum*, vol.48, Wien/Leipzig 1906, reprint New York/London, 1966.
- [2.2.6] Boethius, *Boethii Philosophiae Consolatio*, (ed. Bieler, L.), *Corpus Christianorum, Series Latina*, 94, Brepols, 1962.
- [2.2.7] Boethius's *De topicis differentiis*, translated, with notes and essays on the text by E.Stump, Cornell University Press, 1978.
- [2.2.8] Boethius's *De Ciceronis Topica*, translated, with notes and introduction by E.Stump, Cornell University Press, 1978.
- [2.2.9] Boethius, *Die theologischen Tractate*, Übersetzt, eingeleitet und mit Ammerkungen versehen von Michael Elsässer, *Philosophische Bibliothek* 397, Hamburg, 1988.
- [2.2.10] Porphyre, *Isagoge, Texte grec, Translatio Boethii*, Traduction par Alain de Libera et Alain-Philippe Segonds, Introduction et notes par Alain de Libera, Paris, Vrin, 1988.
- [2.2.11] Liebeschütz, H., "Western Christian Thought from Boethius to Anselm", in [1.2]
- [2.2.12] Chadwick, Henry, *Boethius The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy*, Clarendon Press, Oxford, 1981.
- [2.2.13] Gibson, Margret, *Boethius, His Life, Thought and Influence* Basil Blackwell, Oxford, 1981.
- [2.2.14] Spade, P.V., (transl. and ed.) *Five Texts on the Mediaeval Problem of Universals: Porphyry, Boethius, Abelard, Duns Scotus, Ockham*, Hackett Publishing Company, Indianapolis/Cambridge, 1994.
- [2.2.15] Ebbesen, Sten, "Ancient scholastic logic as the source of medieval scholastic logic", in [0.2]
- [2.2.16] de Libera, Alain, *La querelle des universaux, De Platon à la fin du Moyen Age*, Paris, Édition du Seuil, 1966.
- [2.2.17] Sorabji, R., *Aristotle Transformed, The Ancient Commentators and Their Influence*, Cornell University Press, 1990.
- [2.2.18] Blumenthal, H.J., *Aristotle and Neoplatonism in Late Antiquity, Interpretations of the De anima*, Cornell University Press, 1996.
- [2.2.19] Schrimpf, G., *Die Axiomenschrift des Boethius, De Hebdomadibus als philosophisches Lehrbuch des Mittelalters*, (Studien über die Problemgeschichte d. antike u. mittelalterlichen Philosophie 2), Leiden, 1966.
- [2.2.20] ボエティウス 『哲学の慰め』(渡辺義雄訳) 筑摩叢書 139 1969.
- [2.2.21] ボエティウス 『哲学の慰め』(畠中尚志訳) 岩波文庫 1938.
- [2.2.22] 『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』(野町啓編訳) 平凡社 1993.
(「ポルフェリウス・イザゴージェ」(第一注解のみ、石井雅之訳)と「三位一体論」「エウテウケスとネストリウス駁論」(坂口ふみ訳)を含む。)
- [2.2.23] 『中世思想原典集成 14 トマス・アキナス』(山本耕平編訳) 平凡社 1993. (神学小論集第 3 論文「デ・ヘブドマディプス」へのトマス・アキナスの注解書の翻訳であるが、ボエティウスの原文の訳(山本耕平訳)も含まれている。)
- [2.2.24] 『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』(責任編集 田中美知太郎) 世界の名著 中央公論社 1980.
(ポルピュリオスの「イザゴージェ」(水地宗明訳)を含む。)
- [2.2.25] 廣川洋一 『プラトンの学園アカデメイア』 岩波書店 1980.

- [2.2.26] _____, 『イソクラテスの修辞学校 – 西洋的教養の源泉』岩波書店1984.
- [2.2.27] B. チェントローネ 『ピュタゴラス派 その生と哲学』(斎藤憲訳) 岩波書店2000.
- [2.2.28] G.E.R. ロイド 『後期ギリシア科学 アリストテレス以後』(山野耕治・山口義久・金山弥平訳) 法政大学出版局2000.
- [2.2.29] 金澤正剛 『中世音楽の精神史 グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ』講談社選書メチエ 126 1998.
(特に、第2章「ボエティウスの音楽論と中世知識人たち」)

有益なホームページ

- <http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/boeth.html>
(ボエティウスの『イザゴージェー第二注解』の普遍に関する部分の翻訳。福岡歯科大学の永嶋哲也氏提供)

2.3 カロリング・ルネサンスとエリウゲナ

年 代	事 項	著 作
c.329-c.390	ナジアンゾスのグレゴリウス (Gregorius Nazianzenus)	
c.332-c.395	ニュッサのグレゴリウス (Gregorius Nyssenus)	
410-439	マルティアヌス・カペラ (Martianus Capella)	<i>De nuptiis Philologiae et Mercurii</i>
c.525	ボエティウス没	
529	アカデメイア閉鎖、また、Benedictus Casinensis(c.480-c.550) モンテ・カッシーノに修道院創設	
580-662	聖証者マキシモス (Maximus Confessor)	
6世紀	擬ディオニシウス文書 (corpus dionysicum) 成立	
c.580	Cassiodorus (c.485-) 没	<i>Institutiones divinarum et saecularium litterarum</i>
604	大グレゴリウス教皇没	
622	ヒジュラ (イスラム共同体の成立)	
633	Isidorus (c.560-) 没	<i>Etymologiae</i>
735	Beda Venerabilis (c.673-) 没	
800	カール大帝戴冠	
804	Alcuinus 没 (c.730 生)	<i>Grammatica</i>
8世紀初頭	Eriugena アイルランドに生まれる	
827	ビザンティン皇帝ミカエル2世、擬ディオニシウス文書をフランク王ルードヴィッヒに贈る	
827-834	Hilduinus による Corpus dionysicum のラテン訳	
840-877	カール2世 (禿頭王) 在位	
c.848	Eriugena 大陸に渡る	
850-851		『予定論 (<i>De divina praedestinatione</i>)』
c.851	Eriugena カール2世の宮廷学校教師となる	
859/60		『マルティアヌス注解 (<i>Annotationes in Martianum</i>)』

860-862	『擬ディオニュシオス文書』ラテン語訳 (1稿)
862-866	マキシモスの『アンビグア (Ambigua)』 『タラシオスへの質疑応答 (Quaestiones ad Thalassium)』のラテン語訳
862-864	ニュッサのグレゴリウスの『人間創造 論』のラテン語訳 (<i>De imagine</i>)
865-875	『擬ディオニュシオス文書』ラテン語訳 (2稿)
864-866	『ペリヒュセオン (<i>Periphyseon</i>)』
865-c.870	『天上位階論注解 (<i>Expositiones super ier- archiam caelestem</i>)』、『ヨハネ福音書序文 講話 (<i>Homilia in prologum evangelii Io- hannis</i>)』、『ヨハネ福音書注解 (<i>Commen- tarius in evangelium Iohannis</i>)』
877 以降	Eriugena の消息分らず

参 考 文 献

- [2.3.1] 『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』(野町啓編訳) 平凡社 1993.
(Cassiodorus, Isidorus, Benedictus, Gregorius magnus の著作を含む)
- [2.3.2] 『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』(大谷啓治編訳) 平凡社 1992.
(Beda Venerabilis, Alcuinus の著作、今義博による『ペリヒュセイオン』の約 6 分の 1 の翻訳を含む。)
- [2.3.3] 『中世思想原典集成 3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』(大森正樹編訳) 平凡社 1994.
(Corpus dionysicum, Johannes Damascenus の著作を含む)
- [2.3.4] J. ルクレール、F. ヴァンダンブルーク 『キリスト教神秘思想史 2 中世の霊性』 平凡社 1997.
- [2.3.5] 『中世の修道制』(上智大学中世思想研究所編) 創文社 1991.
- [2.3.6] P. ヴォルフ 『ヨーロッパの知的覚醒 中世知識人群像』(渡邊昌美訳) 白水社 2000.
(第 1 部がカロリング・ルネサンスで、アルクイヌスの紹介に当てられている)
- [2.3.7] P. リシェ 『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』(岩村清太訳) 知泉書館 2002.
- [2.3.8] Johannes Eriugena, *Periphyseon*, Corpus Christianorum continuatio Mediaevalis vols. 161-64.
Brepols, 1996-2000. (4 巻まで)
- [2.3.9] Johannes Eriugena, *Periphyseon*, (ed. by I.P.Sheldon-Williams) Dublin 1978-83. (3 巻までで、英
語の対訳つき)
- [2.3.10] *Johannis Scoti Opera quae supersunt omnia*, Patrologia Latina, t.122, Paris, 1853.
- [2.3.11] John Scottus Eriugena, *Treatise on Divine Predestination*, tr. by Marry Brennan, University of
Notre Dame, 1998.
- [2.3.12] Eriugena, *Periphyseon* (The division on Nature), Translation by I.P.Sheldon-Williams. Revised by
John J. O'Meara, (Cahiers d'études médiévales. Cahier spécial, 3) Montréal Dumbarton Oaks,
1987.

- [2.3.13] Érigène, *De la division de la Nature, Periphyseio*, Introduction, traduction et notes par Francis Bertin, Presses universitaires de France, 1995- (jusqu'à 4ème livre)
- [2.3.14] Johannes Scotus Eriugena, *Über die Einteilung der Natur*, Übers. von Ludwig Noack, Hamburg, Meiner, 1984.
- [2.3.15] Carabine, Deirdre, *John Scottus Eriugena*, Great Medieval Thinkers, Oxford University Press, 2000.
- [2.3.16] Cappuyns, M., *Jean Scot Érigène, sa vie, son oeuvre, sa pensée*, Louvain, Mont César 1933.
- [2.3.17] O'Meara, J.J., *Eriugena*, Oxford University Press, 1989. (『ヨハネ福音書序文講話』の英訳を含む)
- [2.3.18] R.J. シロニス, 『エリウゲナ思想と中世の新プラトン主義』創文社1992.

2.4 10・11 世紀とアンセルムス

年 代	事 項	アンセルムスの著作
910	クリュニー修道院創立	
942/42-1003	ゲルベルトゥス (Gerbertus, Sylvester II)	
962	オットー大帝戴冠	
c.1005-88	ベレンガリウス (Berengarius Turonensis)	
1007-72	ペトルス・ダミアニ (Petrus Damiani)	
c.1010-89	ランフランクス (Lanfrancus Cantuariensis)	
1033	アンセルムス (Anselmus Cantuariensis)、北イタリアアオスタにて生	
1054	東西教会の分裂	
1059	アンセルムス、ベネディクト会ベック修道院に入る	
1073-85	グレゴリウス 7 世在位	
1076		『モノロギロン (Monologion)』
1077-78		『プロスロギオン (Proslogion)』
1079	アンセルムス、ベック修道院長	
1080-85		『文法家について (De grammatico)』、『真理論 (De veritate)』、『自由意志論 (De libertate arbitrii)』
1093	アンセルムス、カンタベリー大司教	
1094-98		『なぜ神は人となったか (Cur deus homo)』
1095	第 1 回十字軍宣言	
1098	シトー修道会設立	
1099-1100		『乙女マリアの懐妊と原罪について (De conceptu virginali et de originali peccato)』
1102		『聖霊の発出について (De processione Spiritus Sancti)』
1107-8		『神の予知・予定・恩寵と自由意思の調和について (De concordia praescientiae et praedestinationis et gratiae Dei cum libero arbitrio)』
1109	アンセルムス没	

Anselmus, *Proslogion*, c.2.

- [1] Ergo, domine, qui das fidei intellectum, da mihi, ut quantum scis expedire intelligam, quia es sicut credimus, et hoc es quod credimus.
- [2] Et quidem credimus te esse aliquid quo nihil maius cogitari possit.
- [3] An ergo non est aliqua talis natura, quia «dixit insipiens in corde suo: non est deus?»
- [4] Sed certe ipse idem insipiens, cum audit hoc ipsum quod dico: aliquid quo maius nihil cogitari potest, intelligit quod audit; et quod intelligit in intellectu eius est, etiam si non intelligat illud esse.
- [5] Aliud enim est rem esse in intellectu, aliud intelligere rem esse.
- [6] Nam cum pictor praecogitat quae facturus est, habet quidem in intellectu, sed nondum intelligit esse quod nondum fecit.
- [7] Cum vero iam pinxit, et habet in intellectu et intelligit esse quod iam fecit.
- [8] Convincitur ergo etiam insipiens esse vel in intellectu aliquid quo nihil maius cogitari potest, quia hoc cum audit intelligit, et quidquid intelligitur in intellectu est.
- [9] Et certe id quo maius cogitari nequit, non potest esse in solo intellectu.
- [10] Si enim vel in solo intellectu est, potest cogitari esse et in re, quod maius est.
- [11] Si vero id quo maius cogitari non potest, est in solo intellectu: id ipsum quo maius cogitari non potest, est quo maius cogitari potest.
- [12] Sed certe hoc esse non potest.
- [13] Existit ergo procul dubio aliquid quo maius cogitari non valet, et in intellectu et in re.

- [1] そこで、信仰に理解を与える主よ、あなたが私たちの信じているように存在し、あなたが私たちの信じているところのものであることを、私に有益とお考えになられるだけ、私が理解するように計ってください。
- [2] そして確かにあなたが、それより大きなものは何も考えられない何者かであることを、私たちは信じています。
- [3] しかし、「愚かな者は心の内で神は存在しないと言った」のであるから、あるいは、そのようなある本性は存在しないのであろうか。
- [4] しかし、この愚かな者自身は私が語るところの、それより大きなものが何も考えられない何ものかということを知るとき、もちろんその聞いたことを理解する。そして、理解したことは、たとえそれが存在することを理解したのではないにしても、彼の理解のうちにある。
- [5] そもそも、ものが理解のうちにあることと、ものが存在していることを理解することは同じではない。
- [6] このように、画家がその描こうとしていることをあらかじめ考えるとき、彼は、まだ描いていないものを理解のうちにもっているが、それが存在することはまだ理解していない。
- [7] しかし、描き上げたとき、彼はすでに描いたものを理解のうちにもち、またそれが存在することも理解している。
- [8] だから、それより大きなものが何も考えられない何ものかということを知るとき、愚かな者は理解し、そして理解したものは何でも理解のうちにあるから、それが少なくとも理解のうちにあることは、彼にしても納得しているところである。

- [9] そして、もちろんのこと、それより大きなものが考えられえないものが理解のうちにのみあることはありえない。
- [10] なぜなら、もし少なくとも理解のうちにだけでもあるなら、それが実在としても存在することは考えられうるし、そのほうがより大きいからである。
- [11] そこで、もしそれより大きなものが考えられえないものが理解のうちにのみあるとなると、それより大きなものが考えられえないもの自身が、それより大きなものが考えられうるものであることになる。
- [12] しかし、確かに、これはありえないことである。
- [13] それゆえ、疑いもなく、それより大きなものが考えられえない何ものかは、理解のうちにもまた実在としても存在する。

参 考 文 献

- [2.4.1] 『中世思想原典集成 7 前期スコラ哲学』(古田暁編訳) 平凡社 1996.
(Petrus Damiani, Anselmus の著作を含む)
- [2.4.2] 『中世思想原典集成 10 修道院神学』(矢内義顕編訳) 平凡社 1997.
(Lanfrancus, Anselmus などの著作を含む)
- [2.4.3] Leclercq, Jean, *L'amour des lettres et le désir de dieu: Initiation aux auteurs monastiques du moyen âge*, Paris, Les édition du Cerf, 1957.
ルクレール、ジャン 『修道院文化入門-学問への愛と神への希求』(神崎忠昭・矢内義顕訳) 知泉書館、2004.
- [2.4.4] J. ルクレール、F. ヴァンダンブルーク 『キリスト教神秘思想史 2 中世の靈性』 平凡社 1997.
- [2.4.5] 『中世の修道制』(上智大学中世思想研究所編) 創文社 1991.
- [2.4.6] P. ヴォルフ 『ヨーロッパの知的覚醒 中世知識人群像』(渡邊昌美訳) 白水社 2000.
(第 2 部が Gerbertus の紹介に当てられている)
- [2.4.7] *S. Anselmi Opera omnia*, ed. F.S. Schmitt (6 vols.) Seckau-Rome-Edinburgh; reprinted Stuttgart-Bad Cannstatt, 1938-61 (repr. h., 1968.)
- [2.4.8] *Anselm of Canterbury, [Works]*, English trans. by J. Hopkins and H. Richardson (4 vols.) London-Tronto-New York, 1974-6.
- [2.4.9] *L'œuvre de S. Anselme de Cantorbéry*, French trans. by M. Corbin *et al.* (5 tomes), Cerf, 1986-90.
- [2.4.10] *The Cambridge Companion to Anselm*, ed. by B. Davies and B. Leftow, Cambridge UP, 2004
- [2.4.11] 『アンセルムス全集』(古田暁訳) 聖文社 1980.
- [2.4.12] R.W. サザーン 『カンタベリーのアンセルムス 風景の中の肖像者』(矢内義顕訳) 知泉書館 2015.
- [2.4.13] D. ヘンリッヒ, 『神の存在論的証明 近世におけるその問題と歴史』(本間他訳) 法政大学出版局 1986.
- [2.4.14] 池上俊一 『ロマネスク世界論』、名古屋大学出版会 1999.

2.5 12 世紀ルネサンス

年 代	事 項	著 作
1033-1109	カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis)	
c.1050-1120/25	ロスケリヌス (Roscelinus)	
c.1070-1122	シャンポーのギョーム (Guillaume de Champeaux)	
1079	アベラール (Petrus Abaelardus) 生	
1085/90-1154	ジルベルトゥス・ポレターヌス (Gilbertus Porretanus)	
c.1085-1122	コンシュのギョーム (Guillaume de Conches)	
1090-1153	クレルヴォーのベルナルドゥス (Bernard de Clairvaux)	
1092	ロスケリヌス 三神論で非難される	
?-c.1130	シャルトルのベルナルドゥス (Bernard de Chartres)	
1095/1100-1160	ペトルス・ロンバルドゥス (Petrus Lombardus)	
c.1096-1141	サン=ヴィクトルのフーゴー (Hugo de Sancto Victore)	フーゴー <i>Didascalicon, De sacramentis christianae fidei</i>
1108	サン=ヴィクトル修道院設立	
c.1115-80	ソールズベリーのジョン (John of Salisbury)	
?-1117	ランのアンセルムス (Anselmus Laudunensis)	
c.1117		アベラール <i>Dialectica</i>
1117-18	アベラールのエロイズ事件	
c.1120		アベラール <i>Theologia 'summi boni'</i>
1121	ソワッソン公会議でアベラールの三位一体論が断罪される	
c.1121		アベラール <i>Sic et Non</i>
c.1126		アベラール <i>Theologia Christiana</i>
c.1133		アベラール <i>Theologia 'scholarium'</i>
1138		アベラール <i>Ethica</i>
1140	サンスの公会議でアベラールの三位一体論が断罪される	

1142/44	アベラール没	
1157-7		ロンバルドゥス <i>Sententia</i>
c.1160		ソールズベリのジョン <i>Metalogicon</i>
?-1173	サン=ヴィクトルのリカルドゥス (Richardus de Sancto Victore)	

参 考 文 献

- [2.5.1] (再掲) 『中世思想原典集成 7 前期スコラ哲学』(古田暁編訳) 平凡社 1996.
(Roscelinus, Guillaume de Champeaux, Petrus Abaelardus, Petrus Lombardus の著作を含む)
- [2.5.2] (再掲) 『中世思想原典集成 10 修道院神学』(矢内義顕編訳) 平凡社 1997.
(Bernard de Clairvaux などの著作を含む)
- [2.5.3] 『中世思想原典集成 9 サン=ヴィクトル学派』(泉治典編訳) 平凡社 1996.
(Hugo, Richardus などの著作を含む)
- [2.5.4] 『愛と修道の手紙 - アベラールとエロイズ』(畠中訳) 岩波文庫 1964 (初版 1939) .
- [2.5.5] 『アベラールとエロイズ 愛の往復書簡』(沓掛・横山訳) 岩波文庫 2009.
- [2.5.6] 水野 尚 『恋愛の誕生 12 世紀フランス文学散歩』京都大学学術出版会 (学術選書 015) 2006.
- [2.5.7] 『西欧精神の探究 革新の十二世紀』上下 (堀米・木村編) NHK ライブラリー 2001 (初版 1976) .
- [2.5.8] C.H. ハスキンス 『十二世紀ルネサンス』(別宮・朝倉訳) みすず書房 1989.
- [2.5.9] J. ヴェルジェ 『入門 十二世紀ルネサンス』(野口洋二訳) 創文社 2001.
- [2.5.10] デイヴィッド・ラスカム 『十二世紀ルネサンス 修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成』(鶴島
広和訳) 慶應義塾大学出版会 2000.
- [2.5.11] 伊東俊太郎 『十二世紀ルネサンス 西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波セミナーブックス 42 1993.
講談社学術文庫、2006.
- [2.5.12] E. ジルソン 『アベラールとエロイズ』(中村弓子訳) みすず書房 1987.
- [2.5.13] 柏木英彦 『アベラール 言語と思惟』創文社 1985.
- [2.5.14] 柏木英彦 『中世の春 - 十二世紀ルネサンス』創文社 1976.
- [2.5.15] J. ルゴフ 『中世の知識人 - アベラールからエラスムスへ』(柏木・三上訳) 岩波新書 1977.
- [2.5.16] H. リーベシュッツ 『ソールズベリのジョン 中世人文主義の世界』(柴田平三郎訳) 平凡社 1994.
- [2.5.17] (再掲) A History of Twelfth-Century Western History (ed. by P. Dronke), Cambridge University
Press, 1988.
- [2.5.18] Marenbon, John, *The Philosophy of Peter Abelard*, Cambridge University Press, 1997.

3 アリストテレス哲学の導入

3.1 ギリシア・イスラム文献の翻訳活動

年 代	著作家・著作名	関 連 事 項
c.510-22	Boethius <i>Organon, Isagoge</i>	<i>Anal.Post.</i> を除く。12c. 以前に普及していたのは、 <i>Cat.</i> と <i>De Inter.</i> のみ
9c.	アッバース朝、バグダッドでの組織的翻訳活動 『アリストテレスの神学』 <i>Theologia Aristotelis</i> 『原因論』 <i>Liber de causis</i>	シリア語をへてアラビア語へ Porphyrios, <i>Enneades</i> の部分 (4-6 巻) 訳 Proclus, 『神学綱要』 <i>Elementatio theologica</i> の抜粋
c.800-c.866	Al-Kindi	
870-950	Al-Farabi	
980-1037	Ibn Sina (Avicenna) 『治癒』 <i>Sufficiencia</i> 『医学典範』 <i>Canon medicinae</i>	
1058-1111	Al-Ghazali (Algazel) 『哲学者の意図』 <i>Intentio philosophorum</i> 『哲学者の矛盾』 <i>Destructio philosophorum</i>	
c.1125-1204	Maimonides, 『迷えるものの導き』 <i>Dux neutroum</i>	ユダヤ教徒
1126-1198	Ibn Rushd (Averroes) 『矛盾の矛盾』 <i>Destructio destructionis</i>	通称「注解者」(Commentator) 14c. 初頭まで翻訳なし
1120s	Boethius 訳 <i>Analytica Priora, Topica, Sophistici elenchi</i> の再発見	
c.1125-50	Iacobus de Venetia による翻訳 <i>Analytica Posteriora</i> <i>Sophistici elenchi</i> <i>Parva naturalia</i> <i>De anima</i> <i>Physica</i> <i>Metaphysica</i>	断片 ‘vetustissima’
12c. 末	Gerardus de Cremona, Dominicus Gundissalinus らのトレドでの活動	

- [3.1.8] Dimitri Gutas, *Greek Thought, Arabic Culture*, Routledge, 1998.
邦訳 ディミトリ・グタス 『ギリシア思想とアラビア文化 初期アッバース朝の翻訳活動 (山本啓二訳) 勁草書房 2002.
- [3.1.9] (再掲) Kretzmann, N., Kenny, A. and Pinborg, J. (ed.), *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, Cambridge U.P., 1982. (その第 2 章に Aristoteles latinus の詳細な翻訳過程を掲げる。)

3.2 大学の成立と托鉢修道会

年 代	大 学	托鉢修道会
c,1150	Dominicus Gundisalvi, <i>De divisione philosophiae</i>	
1170-1221		ドミニクス
1170-80	パリ大学の最初の結社?	
1181-1226		アッシジのフランシスコ
1200	パリ大学への特許状	
1205-7		ドミニクス
1208-9	オックスフォードでの "Town and Gown"	
1209		第 1 回アルビ派十字軍
1210	アリストテレスの自然学への禁令	フランシスコ会の口頭認可
1216		ドミニコ会の認可
1222	ボローニャ大学の退去	
1224	ナポリ大学の創設(フリードリッヒ 2 世)	
c.1225	アレクサンダー・ハレンシス、パリで初めてロンバルドゥスの『命題集』を神学部の教科書として用いる	
1229		アルビ派の紛争終了
1229-31	パリ大学の大退去 クレモナのローランドゥス、ドミニコ会初代神学教授	
1231	教皇勅書「パレンス・スキエンティアールム」	
1233		異端審問制度創設
1236	アレクサンダー・ハレンシス、フランシスコ会入会	
c.1243	アヴェロエスのラテン訳完成	
1252-57	在俗神学教授と托鉢修道会の対立	

1255	学芸学部アリストテレスのほぼ全著作を カリキュラムとする	
1257		ボナヴェントゥラ、フランシスコ会総長 となる
1270	第 1 回学芸学部へのタンピエによる非難	
1277	第 2 回学芸学部へのタンピエによる禁令	

参 考 文 献

- [3.2.1] Fernand Van Steenberghen, *La Philosophie au XIII^e siècle*, Louvain-La-Neuve, 1991².
- [3.2.2] Jacques Verger, *Les Universités au Moyen Âge*, PUF, 1973.
邦訳 J. ヴェルジェ 『中世の大学』 みすず書房 1979.
- [3.2.3] 田中峰雄 『知の運動 —十二世紀ルネサンスから大学へ—』 ミネルヴァ書房 1995.
- [3.2.4] 堀米庸三 『正統と異端 ヨーロッパ精神の底流』 中公新書 1964.
- [3.2.5] ユーリー・スタヤノフ 『ヨーロッパ異端の源流 カタリ派とボゴミール派』 平凡社 2001.
- [3.2.6] Mary Curruthers, *The Book of Memory – A Study of Memory in Medieval Culture*, Cambridge UP, 1990.
邦訳 M. カラザース 『記憶術と書物 – 中世ヨーロッパの情報文化』 (別宮貞徳監訳) 工作社 1997.

3.3 1270 年代の危機と「ラテン・アヴェロエス主義」

年 代	事 項	著 作
1210	パリ教会会議での「自然学書」教授の禁止	
1215/8	Robert de Courçon の「自然学書」と『形而上学』の学芸学部での教授禁止	
1231	法王グレゴリウス 9 世の「自然学書」調査命令	
1240 ごろ	シゲルス生(？)	アヴェロエスのほぼ全著作の普及
1241/8	グレゴリウス 9 世没	
1245-48	アキナス、神学部学生	
1245/9	トゥールーズ大学への「自然学書」の禁令	
1248-52	アキナス、ケルン	
1250-52		ボナヴェントゥラ『命題集注解』
1252	イギリス国民団の『魂について』のカリキュラム規定	
1252-59	アキナス、パリ大学教授	
1253	グロステスト没	
1253-56		アキナス『命題集注解』
1255/3/19	学芸学部全体がアリストテレスのほぼ全著作をカリキュラムに規定	
1255-57	シゲルス、パリで勉学	
1256-59		アキナス『真理論』、『ボエティウス三位一体論注解』
1257/2/2	ボナヴェントゥラ、フランシスコ会総長に選出される	
1259 秋	アキナス、パリを去りイタリアへ	
1259-61		アキナス『対異教徒大全』
1260-65	異端的アリストテレス主義の登場	
1263	法王ウルバヌス 4 世による「自然学書」の禁令の確認 タンピエ、神学部教授となる	
1263 ころ		アルベルトゥス『知性単一説駁論』
1263-65	シゲルス、学芸学部教師となる(？)	
1265-68		アキナス『神学大全』第 1 部、『能力論』、『デ・アニマ注解』

1265-70		シゲルスの「初期著作」
1266/8	シゲルスの名、法王特使ブリオンのシモンの文書に登場	
1267/3-4		ボナヴェントゥラ『十戒についての講話』
1268/2-5		ボナヴェントゥラ『聖霊の七つの賜物についての講話』
1268/10/7	タンピエ、パリ司教となる	
1269/5	アキナス、二度目の神学部教授となる	
1269 末		シゲルス『「魂について」第 3 巻問題集』
1270		アキナス『知性単一説駁論』
		シゲルス『知性について』(?)
		ダキアのボエティウス『世界の永遠性について』『最高善について』
1270/12/10	タンピエの第 1 回断罪 (13 箇条)	
1271-72		アキナス『神学大全』第 2 部
1272/4/1	学芸学部の神学的問題排除規定	
1272	アキナス、パリを去りイタリアへ	
1272-73		アキナス『神学大全』第 3 部
1272-75		シゲルス『形而上学注解問題集』
1273/4-5		ボナヴェントゥラ『六日の業についての講話』
1273 ころ		シゲルス『知性的魂について』
		アエギディウス・ロマーヌス『可能知性の多数化について』
1236-76		アルベルトゥス『十五問題論』
1274	アキナス、ボナヴェントゥラ没	
1275-76		シゲルス『原因論注解問題集』
1276	ガンのヘンリクスパリ大学神学部教授 (1292 年まで)	
1276/9/2	秘密の教授への禁令	
1276/11/23	シゲルスら、異端審問官ヴァルのシモンに召喚され、その後パリを逃亡か?	
1277/1/18	法王ヨハネス 21 世のタンピエの書簡	
1277/3/7	タンピエの第 2 回断罪 (219 箇条)	
1277/3/18	オックスフォードにおいて、カンタベリー司教のドミニコ会士ロバート・キルワルドバイによるアキナス的命題の断罪	

1280/11/15	アルベルトゥス没
1281-84	シゲルス没
1284/1/29	カンタベリー司教のフランシスコ会士 ジョン・ペッカム、1277/3/18 の断罪を 確認
1323/7/18	アキナス、列聖
1325/2/14	パリ司教エティエンヌ・ブレが 1277/3/7 の断罪のうち、アキナスに関わるもの を取り消す

参 考 文 献

- [3.3.1] (再掲) Fernand Van Steenberghen, *La Philosophie au XIII^e siècle*, Louvain-La-Neuve, 1991².
- [3.3.2] (再掲) 『中世思想原典集成 12 フランシスコ会学派』(上智大学中世思想研究所編訳・監修) 平凡社 2001.
- [3.3.3] (再掲) 『中世思想原典集成 13 盛期スコラ哲学』(上智大学中世思想研究所編訳・監修) 平凡社 1993.
- [3.3.4] (再掲) 『中世思想原典集成 14 トマス・アキナス』(上智大学中世思想研究所編訳・監修) 平凡社 1993.
- [3.3.5] Alain de Libera, *Penser au Moyen Âge*, Paris, 1991.
(邦訳、『中世知識人の肖像』(阿部・永野訳) 新評論 1994.
- [3.3.6] 川添信介 『水とワイン—西欧 13 世紀における哲学の諸概念』 京都大学学術出版会 2005.
- [3.3.7] Étienne Tempier, *La Condamnation parisienne de 1277. Nouvelle édition du texte latin, traduction, introduction et commentaire par Piché, David avec la collaboration de C.Lafleur*, Paris, 1988.
- [3.3.8] Rorand Hissette, *Enquête sur les 219 articles condamnés à Paris le 7 mars 1277*, Louvain/Paris, 1977.
- [3.3.9] Bougerol, J.G., *Introduction à saint Bonaventure*, Paris, Vrin, 1988.
- [3.3.10] J-P.Torrell, *Initiation à saint Thomas d'Aquin Sa personne et son oeuvre* Editions Universitaires de Fribourg, 1993.
(英訳) *The person and his work*, translated by Robert Royal Washington, D.C., Catholic University of America Press, 1996.

パリ司教エティエンヌ・タンピエによる 1270 年の非難宣言

次に挙げられる誤謬は断罪され、また意図的にこれらの誤謬を教授したり、擁護したりするすべての者とともに、破門される。—1270 年聖ニコラウスの冬の祝祭日後の水曜日、パリ司教ステファヌス師によって。

- [1] すべての人間の知性は数的に同一である。
- [2] 「人間が知性認識する」というのは誤りであり、不適当な述べ方である。
- [3] 人間の意志は必然的に意志し、あるいは選択する。
- [4] この地上で働きをなしているものすべては、天体の定める必然性のもとにある。
- [5] 世界は永遠である。
- [6] 最初の人間というものは決して存在しなかった。
- [7] 人間である限りでの人間の形相としての魂は、身体の消滅にともなって消滅する。
- [8] 死後に身体を離れた魂は物的な火に苦しめられることはない。
- [9] 自由決定力は受動的能力であって能動的能力ではない。自由決定力は欲求されうるものによって必然的に動かされる。
- [10] 神は個別者を認識しない。
- [11] 神は自分以外のものを認識しない。
- [12] 人間的行為は神の摂理に支配されない。
- [13] 神は、消滅しうるものあるいは死すべきものに対して、不死性あるいは不滅性を与えることはできない。

Stephanus Tempier, *Condemnatio anno 1270*

Isti sunt errores condemnati et excommunicati cum omnibus qui eos docuerint scienter vel asseruerint, a domino Stephano, Parisiensi episcopo, anno Domnini MCCLXX, die mercurii post festum beati Nicholai hyemalis.

- [1] Quod intellectus omnium hominum est unus et idem numero.
- [2] Quod ista est falsa vel impropria: homo intelligit.
- [3] Quod voluntas hominis ex necessitate vult vel eligit.
- [4] Quod omnia que hic in inferioribus aguntur subsunt necessitati corporum celestium.
- [5] Quod mundus est eternus.
- [6] Quod nunquam fuit primus homo.
- [7] Quod anima que est forma hominis secundum quod homo corrumpitur corrupto corpore.
- [8] Quod anima post mortem separata non patitur ab igne corporeo.
- [9] Quod liberum arbitrium est potentia passiva, non activa; et quod necessitate movetur ab appetibili.
- [10] Quod Deus non cognoscit singularia.
- [11] Quod Deus non cognoscit alia a se.
- [12] Quod humani actus non reguntur providentia Dei.
- [13] Quod Deus non potest dare immortalitatem vel incorruptionem rei corruptibili vel mortali.

前期の要約と後期の予定

(pp.3-4 の略年表を参照)

- [1] 序説：西洋中世哲学史を学ぶ意義
- [2] 12 世紀半ばまでの概観
 - (1) 教父における古代の継承とボエティウス
 - (2) カロリング・ルネサンスとエリウゲナ
 - (3) 10・11 世紀とアンセルムス
 - (4) 12 世紀ルネサンス
- [3] アリストテレス哲学の導入
 - (1) ギリシア・イスラム文献の翻訳活動
 - (2) 大学の成立と托鉢修道会
 - ***** 前期 (I) はここまで *****
 - (3) 1270 年代の危機と「ラテン・アヴェロエス主義」
- [4] トマス・アキナス
 - (1) 生涯と著作
 - (2) 体系の構造 (『神学大全』による)
 - (3) 神と創造 (存在論の基本構造)
 - (4) 人間存在と認識 (心身問題と認識理論)
 - (5) 幸福と行為 (倫理学)
 - (6) 哲学と神学
- [5] ドゥンス・スコトゥス
- [6] ウィリアム・オッカム

4 トマス・アキナス

4.1 生涯と著作

年代	事項	主要著作
1244/45 c.1230-39	ナポリ近郊のロッカセッカに生 モンテ・カッシノのベネディクト修 道院	
1239-44 1244.4	ナポリ大学で勉学(自由学芸と哲学) ドミニコ会入会	
1244-45	ドミニコ会入会に反対する家族ロッ カセッカに幽閉	
1245 秋	幽閉を解かれ、ドミニコ会に戻る	
1245-48	パリ大学、哲学の勉学の継続、アル ベルトゥス・マグヌスのもとで神学	
1248-52	ケルン大学 (Studium generale)、ア ルベルトゥス・マグヌスの学生、助手 聖書学講師	『イザヤ書注解』 <i>Expositio super Isaiam ad lit- teram</i>
1252-56	パリ大学神学部命題集講師	『命題集注解』 <i>Scriptum super libros Senten- tiarum</i> 『存在者と本質について』 <i>De ente et essentia</i>
1256-59	パリ大学神学部正教授 (magister regens)	『真理についての定期討論集』 <i>Quaestiones dis- putatae de veritate</i> 『随時討論集 7-11』 <i>Quaestiones de quolibet</i> 『ボエティウス「三位一体論」注解』 <i>Super Boetium De Trinitate</i>
1259-61	ナポリ?	『対異教徒大全』起筆 <i>Summa contra Gentiles</i>
1261-65	オルヴィエトでドミニコ会修道士の 教育	『対異教徒大全』完成 『ヨブ記注解』 <i>Expositio super Iob ad litteram</i> 『黄金連鎖』(マタイ福音書) <i>Glossa continua super Evangelia(Catena aurea)</i> 『神名論注解』 <i>Super librum Dionysii de divinis nominibus</i>
1265-68	ローマ、新設の大学正教授	『神学大全』第1部 『黄金連鎖』(残り3福音書) 『能力についての定期討論集』 <i>Quaestiones dis- putatae de potentia</i> 『魂についての定期討論』 <i>Quaestio disputata de anima</i> 『霊的被造物についての定期討論』 <i>Quaestio disputata De spiritualibus creaturis</i>

1268-72	パリ大学神学部正教授	<p>『神学要綱』 <i>Compendium theologiae</i> 『デ・アニマ注解』 <i>Sententia Libri De Anima</i> 『神学大全』 第 2 部 『マタイ福音書注解』 <i>Lectura super Matthaeum</i> 『ヨハネ福音書注解』 <i>Lectura super Ioannem</i> 『悪についての定期討論集』 <i>Quaestiones disputatae de malo</i> 『徳についての定期討論集』 <i>Quaestiones disputatae de virtutibus</i> 『随時討論集 1-6,12』 『 < 感覚と感覚されるもの > 注解』 <i>Sententia Libri de sensu et sensato</i> 『自然学注解』 <i>Sententia super Physicam</i> 『気象学注解』(2 巻 5 章まで) <i>Sententia super Meteora</i> 『命題論注解』(2 巻 2 章まで) <i>Expositio Libri Peryermenias</i> 『分析論後書注解』 起筆 <i>Expositio Libri Posteriorum</i> 『倫理学注解』 <i>Sententia Libri Ethicorum</i> 『政治学注解』(3 巻 6 章まで) <i>Sententia Politicorum</i> 『形而上学注解』 <i>Sententia super Metaphysicam</i> 『原因論注解』 <i>Super Librum de causis</i> 『知性単一説論駁』 <i>De unitate intellectus contra Averroistas</i></p>
1272-73	ナポリ、新設の大学で教授	<p>『世界の永遠性について』 <i>De aeternitate mundi</i> 『離在実体について』 <i>De substantiis separatis</i> 『神学大全』 第 3 部 (第 90 問まで) 『パウロ書簡注解』 <i>Expositio et Lectura super Epistolas Pauli Apostoli</i> 『詩篇注解』(54 篇まで) <i>Postilla super Psalmos</i> 『天体論注解』(3 巻冒頭まで) <i>Sententia super librum de caelo et mundo</i> 『生成消滅論注解』(1 巻 5 章まで) <i>Sententia super libros de generatione et corruptione</i></p>
1273.11	すべての執筆を停止する	
1274.3.7	没	
1323	列聖	

参 考 文 献

- [4.1.1] *Sancti Thomae Aquinatis doctoris angelici Opera omnia iussu Leonis XIII. P.M. edita, cura et studio fratrum praedicatorum, Romae, 1882-*
- [4.1.2] トマス・アキナス『神学大全』(高田三郎他訳) 創文社 1960 (第1部の全体、第2部のほぼ全体が終了、第3部は現在進行中)
- [4.1.3] (再掲)『中世思想原典集成 14 トマス・アキナス』(上智大学中世思想研究所、山本耕平編訳・監修) 平凡社 1993
(含まれているのは、『聖書の勧めとその区分』、『聖書の勧め』、『存在者と本質について』、『ボエティウス三位一体論註解』(部分)、『ボエティウス デ・ヘドマディプス註解』、『命題論註解』、『形而上学註解』(部分)、『知性の単一性について - アヴェロエス主義者たちに対する論駁』、『離存的実体について(天使論)』、『使徒信条講話』、『種々の敬虔な祈り』、『兄弟ヨハネスへの学習法に関する訓戒の手紙』)
- [4.1.4] 山田晶『トマス・アキナス 神学大全』I、II(中公クラシックス) 2014
(原本は1975年刊の「世界の名著」の一冊。『神学大全』第1部冒頭の部分の訳で、詳細な註釈が極めて有益。)
- [4.1.5] 稲垣良典『トマス・アキナス』(人類の知的遺産 20) 講談社 1979 (講談社学術文庫版 1999)
(いくつかの著作の抄訳を含む。この末尾に日本語の文献表があるので、参考になる。)
- [4.1.6] トマス・アキナス『神秘と学知 - 『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究 -』(長倉久子訳注) 創文社 1996
- [4.1.7] トマス・アキナス『君主の統治について—謹んでキプロス王に捧げる』(柴田平三郎訳) 岩波文庫 2009.
- [4.1.8] トマス・アキナス『自然の諸原理について』(長倉久子/松村良祐訳注) 知泉書館 2008.
- [4.1.9] 『トマス・アキナスの心身問題—『対異教徒大全』から』(川添信介訳注) 知泉書館 2009
- [4.1.10] トマス・アキナス『在るものと本質について』(稲垣良典訳注) 知泉書館 2012
- [4.1.11] (再掲) Torrell, Jean-Pierre, *Initiation à saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son œuvre*, Cerf, Fribourg, 1993.
English Translation, *Saint Thomas Aquinas. The Person and his Work*, vol.1, trans. Robert Royal, Catholic University of America Press, 1996.
- [4.1.12] Étienne Gilson, *Le thomisme: Introduction à la philosophie de saint Thomas d'Aquin*, Vrin, 1972⁶
- [4.1.13] Kretzmann, N. and Stump, E.(eds.), *The Cambridge Companion to Aquinas*, Cambridge University Press, 1993.
- [4.1.14] Fernand van Steenberghe, *Le thomisme*, (Que sais-je?, 587), Press Universitaires de France, 1983
『トマス哲学入門』(稲垣・山内訳) 文庫クセジュ 704 白水社 1990
- [4.1.15] Brian Davies, *The Thought of Thomas Aquinas*, Clarendon Press, 1992
- [4.1.16] Eleonore Stump, *Aquinas*(Arguments of the Philosophers), Routledge, 2003
- [4.1.17] 稲垣良典『トマス・アキナス』(思想学説全書) 勁草書房 1979
- [4.1.18] Miethe, T.L. and Bourke, Vernon, *Thomistic Bibliography 1940-1978*, Greenwood Press, 1980
- [4.1.19] Richard Ingardia, *Thomas Aquinas: International Bibliography 1977-1990*, The Philosophy Documentation Center, 1993
- [4.1.20] <http://www.corpusthomicum.org/>
アキナスの著作(ラテン語)のほとんどすべてが見られて、検索も出来る。

4.2 体系の構造

『神学大全』全体の概略的構造

- 序論：「聖なる教え」について
- 第 1 部：神について (De Deo)
 - [1] 神の本質に属することがら
 - [2] 神のペルソナの区別に関することがら (三位一体論)
 - [3] 神からの被造物の発出に関することがら (天使、物体、人間)
- 第 2 部：理性的被造物の神への運動について (De motu rationalis creaturae in Deum)
 - [1] 人間の生の究極目的
 - [2] それによって人間が究極目的へと至る、あるいはそれから逸れることがら
 - (1) 行為と情念
 - (2) 行為の原理 (内的原理としての徳、外的原理としての法と恩寵)
- 第 3 部：われわれにとって神へ向かう道である、人間である限りでのキリストについて (De Christo qui, secundum quod homo, via est nobis tendendi in Deum)
 - [1] 救い主について (受肉論、イエスの生涯)
 - [2] 秘蹟について
 - [3] 復活と最後の審判

4.3 神と創造

『神学大全』第 1 部第 2 問-第 26 問（神の存在と一なる本質）

[A] 神の存在証明	第 2 問
[B] 神がそのようなものであるか、むしろどのようなものでないか	
(I) それ自体として神がどのようなものか	
(a) 単純性	第 3 問
(b) 完全性	第 4 問
(c) 善性	第 5-6 問
(d) 無限性	第 7 問
(e) 遍在性	第 8 問
(f) 不変性	第 9 問
(g) 永遠性	第 10 問
(h) 一性	第 11 問
(II) 神はわれわれの認識との関係でどのようなものか	第 12 問
(III) 神の名称	第 13 問
[C] 神のはたらき	
(I) 神の知	
(a) それ自体としての神の知	第 14 問
(b) イデア論	第 15 問
(c) 真理論・虚偽論	第 16-17 問
(d) 生命	第 18 問
(II) 神の意志	
(a) それ自体としての意志	第 19 問
(b) 意志だけに属することがら	
1) 神の愛	第 10 問
2) 神の正義とあわれみ	第 21 問
(c) 意志と知性の両方に関わることがら	
1) 神の摂理	第 22 問
2) 神の予定	第 23 問
3) 生命の書	第 24 問
(III) 神の能力	第 25 問
[D] 神の至福	第 26 問

『神学大全』第 1 部第 44 問-第 119 問（被造物の神からの発出）

[A] 被造物の産出	
(I) 万物の第一原因	第 44 問
(II) 流出の様態	第 45 問
(III) 被造物の持続の根源	第 46 問
[B] 被造物の区別	
(I) 被造物の区別一般	第 47 問
(II) 善悪の区別	第 48-49 問
(III) 霊的・物的被造物の区別	
(a) 天使	第 50-64 問
(b) 物体	第 65-74 問
(c) 人間	第 75-102 問
[C] 被造物の保存と統宰	
(I) 一般論	第 103 問
(II) 統宰の結果	
(a) 第一の結果である被造物の保存	第 104 問
(b) 第二の結果である被造物の変化	
1) 神による被造物の変化	第 105 問
2) 被造物同士の変化	第 106-119 問

神の存在証明

(A) 答えて言わなければならない。神が存在するという事は五つの道によって証明されうる。さて、第一の道は〔他より〕より明白なものであって、運動という面から得られるものである。

(B) すなわち、この世界において何かのものが動いているということは確実であり、感覚によって確保されている。

(C) ところで、動いているものはすべてそれとは別のものによって動かされている。それは次の理由による。(C-1) 何もかも、それへと動いているものに対して可能態にある限りにおいてでなければ、動くことはない。それに対して、何か〔他のものを〕動かすのはそれが現実態にある限りである。実際、動かすと言うことは何かを可能態から現実態へと引き出すこと以外の何もでもないからである。(C-2) ところが、何か可能態から現実態へもたらされるのは、現実態にある何らかの存在者によってだけである。たとえば、火のような現実態において熱いものが、可能態において熱いものである木材を現実態において熱いものとするのであり、このことによって火は木材を動かして変化させるのである。(C-3) ところで、同じものが同じ観点で同時に現実態にありかつ可能態にあることは不可能であり、可能なのは異なる観点のものにおいてである。実際、現実態において熱いものが同時に可能態において熱いものであることができず、同時に可能態において冷たいものなのである。(C-4) それゆえ、同じ観点で同じ様態において、何か動かしかつ動かされるということ、すなわち何か自分自身を動かすということは不可能である。(C) それゆえ、動いているものはそれとは別のものによって動かされているのでなければならない。

(D) それゆえ、もしそれによって動かされているものが動いているならば、それもまた別のものによって動かされているのでなければならない。そして、その別のものもまたそれとは別のものによって動かされているのでなければならない。ところが、ここで無限に進むことはできない。なぜなら、そうだとすれば何か第一の動者が存在しなくなり、その結果それ以外の別の動者も存在しないことになってしまうからである。というのも、たとえば杖が〔何か別のものを〕動かすのは、杖が手によって動かされているからでしかないように、二次的なもろもろの動者は第一の動者によって動かされているのではないならば〔他のものを〕動かすことがないからである。

(E) それゆえ、何ものによっても動かされことのない何らかの第一動者に達することが必然なのである。そして、これをすべての人は神だと理解しているのである。

(『神学大全』第 1 部第 2 問第 3 項主文)

4.4 人間存在と認識

『神学大全』第 1 部人間論（75 問-102 問）の構成

[A] 人間の自然本性（ <i>natura</i> ）について	
(I) 魂の本質（ <i>essentia</i> ）について	
(a) 魂それ自体について	第 75 問
(b) 魂と身体の合一について	第 76 問
(II) 魂の能力（ <i>potentia</i> ）について	
(a) 能力一般について（本質と魂の関係、）	第 77 問
(b) 能力の間の区別と感覚的能力について	第 78 問
(c) 知性的能力について	第 79 問
(d) 欲求能力一般について	第 80 問
(e) 感覚的欲求能力について	第 81 問
(f) 意志について	第 82 問
(g) 自由決定力について	第 83 問
(III) 魂のはたらき（ <i>operatio</i> ）について	
(a) 身体と合一した魂のはたらきについて	
1) 物体の認識について	
• 何を通じて認識するか	第 84 問
• どのように認識するか	第 85 問
• 何を認識するか	第 86 問
2) 自己の認識について	第 87 問
3) 非物体的なものの認識について	第 88 問
(b) 身体から分離した魂のはたらきについて	第 89 問
[B] 人間の最初の産出（ <i>productio</i> ）について	
(I) 人間そのものの産出について	
(a) 魂に関して	第 90 問
(b) 男の産出	第 91 問
(c) 女の産出	第 92 問
(II) 産出の目的（神の像）	第 93 問
(III) 最初に産出された人間の状態	第 94-101 問
(IV) 最初の人間の産出の場所について	第 102 問

4.5 幸福と行為

『神学大全』第 2 部の構成

- | | |
|--------------------------------|------------------|
| I. 人間の生の究極目的 | (I-II, qq.1-5) |
| II. 究極目的にそれによって到達する (逸れる) もの | (II 部の残り) |
| • 一般的に | (I-II) |
| • 個別的に | (II-II) |

『神学大全』第 2-1 部の構成

- | | |
|---|----------------|
| (I) 人間の行為それ自体について | |
| (1) 人間に固有の行為 (意志的なことから voluntarium) | (qq.6-21) |
| (2) 動物と共有する行為 (情念 passiones) | (qq.22-48) |
| (II) 人間の行為の原理について | |
| (1) 内在的原理 | |
| (A) 習慣一般 (habitus) | (qq.49-54) |
| (B) 善き習慣 | |
| a) 徳 (virtus) | (qq.55-67) |
| b) 聖霊の賜物 | (q.68) |
| c) さまざまな至福 | (q.69) |
| d) 聖霊の享受 | (q.70) |
| (C) 悪しき習慣 = 悪徳 (vitium) と罪 (peccatum) | (qq.71-89) |
| (2) 外在的原理 | |
| (A) 法 (lex) | |
| a) 法一般について | (qq.90-92) |
| b) 永遠法 (lex aeterna) | (q.93) |
| c) 自然法 (lex naturalis) | (q.94) |
| d) 人間の (人定) 法 (lex humana) | (qq.96-97) |
| e) 旧法 | (qq.98-105) |
| f) 新法 (福音の法) | (qq.106-108) |
| (B) 恩寵 (gratia) | (qq.109-114) |

4.6 哲学と神学

「聖なる教え (sacra doctrina)」の概念

『神学大全』第1部第1問

「聖なる教えについて、それはどのようなものであり、どこにまで及ぶのか」

- 1 項： 哲学的諸学のほかに別の教えが必要であるのか
- 2 項： 聖なる教えは学知であるのか
- 3 項： 聖なる教えは一つの学知であるのか
- 4 項： 聖なる教えは実践的学知であるのか
- 5 項： 聖なる教えは他の諸学より価値あるものであるのか
- 6 項： この教えは知恵であるのか
- 7 項： この学知の主題は神であるのか
- 8 項： この教えは議論によるものなのか
- 9 項： 聖書は比喩的に用いられるべきであるのか
- 10 項： 聖書は一つの文字のもとに複数の意味を持っているのか